移動する家族の言語バイオグラフィとアイデンティティ形成
―オーストラリア在住ブータン人家族の事例から―
Linguistic biography and identity formation in transmigratory families: Case studies of Bhutanese families living in Australia

佐藤美奈子(京都大学)
Minako SATO(Kyoto University)

言語バイオグラフィ、言語レパートリー、アイデンティティ、オーストラリア、ブータン

はじめに

本報告では、オーストラリアへ移住したブータン人家族の移民過程を家庭言語選択から分析する。ブータンとオーストラリアは、共に複数の民族を擁する多言語社会であるが、両者は、その成り立ちも現行の民族政策も大きく異なる。19 もの固有の民族を擁するブータンは、1990 年代より“One People, One Nation”をスローガンに一元的国家主義を推し進めてきた。一方、オーストラリアは、1980 年代に多文化主義政策に転向し、積極的に移民を受け入れることにより、現在のような多民族国家となった。本報告では、国家アイデンティティ推進の国家政策のもとで、民族の言語の使用と継承の意義に無自覚であったブータンの少数派民族家族が、移住先のオーストラリアの多言語政策に触発され、民族の言語とアイデンティティを取り戻していく過程を追う。

1. 研究背景

2000 年代以降急増したブータン人移民の特徴は、以下の 3 点である。第 1 は、「家族」を単位としている点である。2021 年オーストラリア国勢調査によると、ブータン生まれの移民は、1 万 2,002 人、25 歳～44 歳が 65.4%を占め、80%以上が既婚者である。全体の 40%は家族世帯で、そのうち 60%は、子どものいる家庭である。第 2 の特徴は、移民家族の多くが東部や南部の民族語地区出身であり、ブータンの国語（ゾンカ語）話者民族ではないということである。2023 年 10 月外務省発表によると、2018 年から 2023 年にかけて約 14,000 人のブータン人が母国を去ったという。出身地域別に、上位から東部のタシガン、モンガル、南部のサムツェ、サルパンと続き、これら 4 地域でブータン人の海外流出の 80%を占める。第 3 は、現在の留学生の多くが、留学後は現地での就職と永住権取得を希望している点である。それは、自動車修理や介護など、オーストラリア政府が永住権取得の高ポイントに指定する分野（SSRM）（Hugo, G. 2008)）を専攻し、修了後は家族でアデレードやタスマニア等、SSRM（地方移住）指定地区へ国内移住している点からもうかがえる。

2. 目的

本報告の目的は、第 1 に「家族であること」が移民過程に与える作用を明らかにすることである。かつての「帰国を前提とする単身者の大学院派遣留学」と異なり、学齢期の子どもをもつ家族も多い現在の移民家族の地域社会への社会化と移民過程に着目する。第 2 にブータン人民族語話者家族の「家庭言語」の選択と、その選択が家族のアイデンティティ形成にいかに関わっていくかの過程を明らかにする。オーストラリア国勢調査 2021 によると、ブータン人移民家族の 96.5%が「家庭で英語以外の言語も用いている」という。ではその「英語以外の言語」とは何か、ゾンカ語を母語としない夫婦は移住先のオーストラリアでどの言語を家庭言語として使用しているのか、その選択は、彼らが異国の地で形成を目指す家族アイデンティティと、さらに家族の将来に向けた展望を、いかに反映しているかを明らかにする。第 3 にブータン人移民家族の「言語バイオグラフィ」(Nekvapil 2023）の語りを通し、「多段階移動」(Sato 2024）と、その過程での家庭言語の選択と継承語への意識、アイデンティティ形成の軌跡をオーストラリア在住の他の移民家族とそのコミュニティの報告（ファン 2016, 他）との比較から明らかにする。

3. 方法

調査方法は、一次調査：海外留学経験者 306 人（帰国者 146 人、現滞在者 160 人）を対象とした質問紙調査、二次調査：民族語話者に絞った半構造化インタビュー調査、第三次調査：子どもをもつ 5 つの家族の夫婦を対象とした夫婦双方への言語バイオグラフィ・インタビューである。言語バイオグラフィ・インタビュー調査では、ブータン東部の農村部から西部の都市部への国内移動、中継国を経て、移住先のオーストラリアへ、さらにオーストラリア内での大都市から地方都市部への国内移住の、移動の過程における家庭内言語（夫婦間、親子間）の選択の軌跡を、夫婦双方の語りから聴取する「羅生門的アプローチ」を用いて採取した。ブータンとオーストラリアの民族政策の相違が家族の言語選択に与える影響、子どもの就学を通した地域社会との交流が生み出す、単身の留学とは異なる家族移民特有の移民過程、その過程における「夫・父親」「妻・母親」の役割の相違、イニティアティブの移行に着目した。

4. 結果

今回の報告では、夫の国家公務員博士過程留学に 14 歳と 9 歳の子どもを同伴した家族 A と、ネパールを中継国とする多段階国際移動で 9 歳と 6 歳の子どもを同伴した起業家家族 D の 2 家族の事例に焦点を当てる。両家族とも夫婦は、東部出身でツァンラカ語を母語とする。子どもたちは西部のティンプーで生まれ育ち、ゾンカ語を「主な」母語・家庭言語として育ってきた。ゾンカ語と英語で機能するブータン社会で民族語一族出身のわが子が不利にならないように、という親の配慮からの意識的な家庭言語選択である。しかしながら、それは、夫婦間の言語と家族間の言語の不一致という「歪な」な状況をもたらしていた。現在、両家族は、移民の家庭言語の継承を推奨するオーストラリアの多文化教育（LOTEs）を受けた子どもたちに触発され、「わが家の言語」として一族の言語を取り戻そうとしている（図 1、 2）。

	家庭言語					
	渡豪前（都市）		渡豪当初（都市）		現在（都市）	
家族	夫婦	家族全体	夫婦	家族全体	夫婦	家族全体
A	Tshangla	英語・ゾンカ語	Tshangla	英語	Tshangla	Tshangla, 英語
B	Lhotshampa, ゾンカ語, 英語	（子どもなし）	Lhotshampa, 英語	（子どもなし）	Lhotshampa 英語	Lhotshampa, 英語
C	Tshangla	英語・ゾンカ語	Tshangla	英語・ゾンカ語	Tshangla	Tshangla, 英語
D	Tshangla	ゾンカ語	Tshangla, 英語	Tshangla, 英語, ゾンカ語	Tshangla	Tshangla, 英語, （ゾンカ語）
E	Kheng	（子どもなし）	Kheng	（子どもなし）	Kheng	英語, Kheng, ゾンカ語（甥を含めた会話）

図 1 家族の移動と家族言語の変化

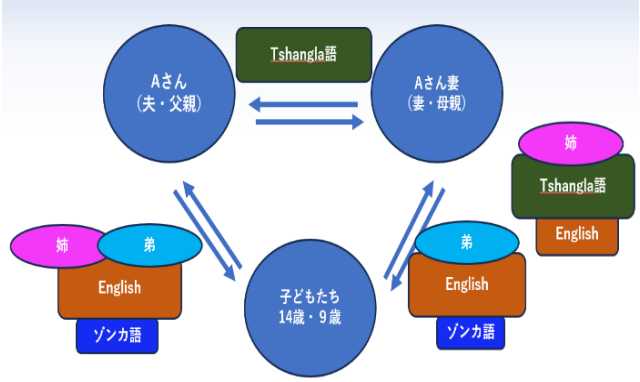

図 2　家族 A の移住前家庭内言語使用

本研究の結果は、2 つの点を示唆する。第 1 は、多民族で構成されるアジアの国々出身の移民を国単位で一括りすることへの再考である（重松 1995）。多民族国家の多様な民族をひとつの「＊＊＊国民」として括ることは、彼らの民族性や複層的なアイデンティティ形成を不可視化する可能性がある。第 2 は、家族移民過程の複線性と複層性である。本研究の家族はいずれも出国のイニシアティブを執ったのは父親であったが、移住先のコミュニティで家族を地域へと導き、移民過程を推し進めたのは地域の学校に就学した子どもたちであり、「ママ友」つながりの母親であった。家族の各々がもたらす影響が融合し、移民過程のイニシアティブが移行していくメカニズムが明らかになった。

参考文献

Nekvapil(2003). Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. International Journal of the Sociology of Language, 162, pp.63-83.

Blommaert, J. and Backus, A (2013). Superdiverse repertoires and the individual, in I. de Saint-Georges and J. J.Weber (eds), *Multilingualism and Multimodality: Current Challenges for Educational Studies*, Rotterdam: Sense Publishers, pp.11-32.